

活動ピックアップ!

長岡
地域
Nagaoka

手仕事でつながる、
わたしたちの憩いの場
長岡つるしびの会



「着物の端切れで簡単にできる」「愛らしくてかわいい」つるしびな作りに気軽に参加してもらいたいと、一年を通して、市内各所でつるしびの展示会や手作り体験会を開催しています。東日本大震災の避難先で「居場所」の大切さを感じ、手仕事を通じた交流の場をつくりたいと、2012年に活動を始めました。いつか皆さんの作品を集めた大きな展示会を開催したいです。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS 長岡 みんなのSDGs

10 人々の雇用と経済成長
地域社会と子どもたちの未来を結ぶ
ゆいジョブながおか



小学5年生から高校3年生までの障がいのある子どもたちを対象に、企業や公共施設などでの仕事体験を通じて社会参加と自己成長を促進する活動を展開。地域のボランティアであるジョブサポーターが子どもたちを見守り支えることで、安心して活動に取り組める環境を整えています。障がいの有無に関わらず、誰もが関わり合い、助け合い、仲良く健やかに過ごせる社会を目指して、これからも活動していきたいです。

市民活動

研究テーマ

虎の巻

良いキャッチコピーをつくるための心構え



より詳しく
知りたい方は
こちら!

イベントのネーミングや呼び込み文、ブログやSNSで文章を書く際の題名など、人目を引くような言葉を生み出したいと考えている方は多いと思います。今回は、良いキャッチコピーを作るための心構えについて解説します。

「キャッチコピー」は造語

「キャッチコピー」は人の注意を引く宣伝文のことです。そもそも「キャッチコピー」という言葉自体、「catch(捕まえる)」と「copy(広告文)」を組み合わせた和製英語。言葉を組み合わせることで、ひと目で何を意味しているのかが伝わる、まさにキャッチコピーのお手本のような造語です。

人は自分の求めることしか目に入らない

最高のコピーとは、読んだ人が「私のための○○だ!」と思えるコピーです。人は「確認

バイアス」と言って、自分がほしい情報ばかりに目が行き、それ以外の情報は避けてしまうという認知特性があります。なので、良いキャッチコピーの第一歩は、受け取り側が日常生活の中で知りたい、こうなりたい、解決したい、これに悩んでいる…と頻りに思っている言葉をできるだけ書き出してみることははじまります。

読み手の心理を徹底的に考える

最近ネットなどで毛穴のアップ画像や、体型など、人の劣等感を刺激する「コンプレック

ス広告」が社会問題になっています。単にエステで「キレイになれます!」や「こんなサービスがあります」と夢を語るより、特定の人が日頃から抱える悩みをグサリと言う方が、広告効果があるようです。劣等感を刺激することは大変下劣で、規制すべきですが、読み手の日常生活での心理状態まで考え抜くという姿勢は、コピーを考える上では見習いたいところですよ。

センターからのお知らせ

あなたの活動サポートします! //

団体登録のススメ

協働センターが、あなたの活動の広報をサポート!
協働センターに団体登録していただくと、下記のサービスを受けられます。

- 協働センターホームページ「コライト」への団体の基本情報掲載
 - 「協働マッチングリスト」への掲載
- 団体の「協力できること」と「協力してほしいこと」をまとめたリストにあなたの団体を掲載



詳しくはこちら!

発行

ながおか
市民協働
センター

〒940-0062
長岡市大手通1丁目4番地10
シティホールプラザアオーレ長岡 西棟3F
Tel . 0258-39-2020
Mail . contact@nagaokakakyodo.net



知る、つながる
好きになる
らこって



つながる
ラジオ



市民活動の
ポータルサイト
コライト

配布場所

長岡市役所及び各支所、サービスセンターの他、市内図書館、コミセン、子育ての駅等、公共施設に設置しています。



知る、つながる、好きになる
ながおか市民活動情報誌

対話でつくる
「心のバリアフリー」



ながおか
市民協働
センター

ながおか市民協働センター

2024

3

vol.

135

特集
ウェスタンバー Forty-Niners
株式会社 原信

NAGAOKA PLAYERS
倉又 司さん

活動ピックアップ
長岡つるしびの会

長岡みんなのSDGs
ゆいジョブながおか

対話でつくる「心のバリアフリー」

年齢や性別、国籍、障がいの有無など、知らず知らずのうちに人との間に見えない線を引いて「違う」というラベルを貼っていませんか。制度上「区別」が必要な場合がありますが、その「区別」が本来必要ない生活圏に持ち込まれているということもあるのかもしれない。政府は障がいのある人もない人も共に暮らせる社会を目指し、令和4年に障害者雇用促進法を改正。法定雇用率も段階的に引き上げられることが決まっています。障がいの有無に関わらず様々な人たちが関わり合うことは、私たちの社会にどのような影響があるのでしょうか。障がいのある方と活動したり、仕事をしたりしている2つの企業にお話を伺いました。

一緒に活動する ～ウェスタンバー Forty-Niners～

東坂之上町にある「ウェスタンバー Forty-Niners」は、聴覚障がいのある倉又さんと一緒に、参加者が手話を使って飲み物や食べ物を注文するイベント「サイレントバー」を開催しました。元々お店には、映画の名前のついたカクテルがたくさんあり、字幕付きの映画が好きな聴覚障がいの方がよく訪れていたそう。耳の不自由なお客さんともコミュニケーションを取れるようになりたいと、スタッフで手話を勉強するようになりました。常連客だった倉又さんから、イベントの開催を提案されたときは「いいね!」と二つ返事で引き受けたそうです。

イベントは、聴覚障がいのない方も含め約50人が参加し大盛況。Forty-Niners



Forty-Ninersで開催した「サイレントバー」の様子。当日、参加者は手話や指差しで飲み物や食べ物を注文していたそう。



お惣菜を作っている様子。必要であれば作業の切り出しを行い、社員の適性を見ながら仕事の分担を考えます。

オーナーの大橋元木さんは、「こうしたイベントが求められているんだと感じました」と言います。「雰囲気は障がいのない人たちの飲み会と変わらず、皆さんとても楽しそうでした。私たちスタッフも、なかなかできない経験ができたと思っています」。当日までの企画や準備も、とてもスムーズに進んだそうです。「最初に倉又さんが何を求めている、私たちに何ができるのか、また企画や準備の過程の中でどんな不便をかける可能性があるのか、きちんと伝えました。何か齟齬があったときも『障がいのある方だから仕方ない』と思わずに、相手に伝えるようにしています」。何か「違い」のある人たちと一緒に活動するためには、特別なことをしなければと思いがちです。しかし大橋さんは「他の人たちと同じ対応でいい」と話します。「優しさは大切ですが、度が過ぎると相手と接することが難しくなってしまいます。冗談を言って笑い合ったり、他の人と変わらない対応をすればよく『ハードルが高い』と思うことが間違いじゃないかと思うんです」。

障がいのある方と一緒に行動するとき「配慮しなければ」と思いがちですが、それがお互いを必要以上に苦しめてしまっているのかもしれない。

一緒に働く ～株式会社 原信～

皆さんお馴染みのスーパーマーケット「原信」を、新潟県内のみならず長野県や富山県でも展開している「株式会社 原信(以下、原信)」。

20年ほど前から障がい者の雇用を始め、2024年現在は、133人の方が食品の加工やお惣菜の調理など様々な部門で働いています。

人事教育部長・小山田 淳さんによると、障がいのある方を雇用する上で大切にしているのは「障がいのある方が、経済的・精神的に自立できるような雇用環境を整えること」だと言います。「仕事を通じて生計を立ててもらえるように、アルバイトではなくパート社員として雇用しています。またできる作業とできない作業はしっかり区別しますが、無関心にも過保護にもならないように、対等に接することを大切にしています」。原信では、雇用の前に実習やトライアルを通してその方の得意としていることを見極めたり、働いた場合どのようなことが求められるのかをしっかりと説明したりしているそう。また働き始めた後も、もっている障がいの名前やその特徴が書かれた「支援カー

ド」を使って、本社と配属先の担当者が密に連絡を取っています。人事教育部で障がい者雇用を担当している近藤 梨沙さんによると、障がいのある社員とのコミュニケーションの機会を増やすために、自主的に交換日記のような取り組みをしている店もあるそうです。

現在、原信では、スタッフとしてだけではなく、新たな障がい者雇用の機会を生み出しています。それは、「おいしさ」と「やさしさ」をコンセプトにした「Hana-well」という新しいブランドの立ち上げです。地球へのやさしさや地産地消など5つの軸を基に商品を開発し、そのパッケージに障がい者の方の作品を使用。また各店舗で障がい者の方のアートの展示も行っています。

「障がい者雇用」と一口に言っても、性格も得意なこと人それぞれ。柔軟な考え方で、多様な活躍の場を用意することが大切なかもしれません。



「Hana-well」の商品の一部。ロゴマークの「はーと」には、心・命・愛・地球といった意味が込められています。

大切なのは、「違う」と境界線を引いて身構えないこと。そして、それぞれの障がいの特性を知り、お互いにどこまでできて、どこまではできないかにちゃんと向き合った上で協働すること。これは、本来障がいの有無に関わらず、どのような関係の中でも必要である一方、「言わなくても、わかるだろう」という認識のもと私たちが見落としてきたものなのかもしれません。まずは、境界線を消し、お互いを知ることから「心のバリアフリー」を始めてみませんか。

NAGAOKA ウワサのあの人にインタビュー! PLAYERS

倉又 司 さん (37歳)

自営業/のびのび楽しい手話ワークショップ

1986年糸魚川市生まれ。自身も第一言語として話す手話や、ろう者の理解を広めたいと手話を楽しく活用するワークショップなどを開催。



未来を生きる子どもたちと 誰もが制限なく夢をもてる社会に

バーを貸し切ったイベントや親子でも楽しめるSUP(※下の写真参照)など、ジャンルに問われない多様なイベントを開催している倉又司さん。倉又さんのイベントに欠かせないキーワードは「手話」。ろう者でもある自身の経験から、手話やろう者の理解を広める活動を行っています。

「意外と気分屋なので、気分が乗った時にしか動けないんです」。そう話す倉又さんの原動力は「誰もが夢をもてる社会にしたい」という気持ち。きっかけは長岡聾学校の寄宿舎指導員で出会った子どもたちでした。「子どもたちは素直にやりたいことを話してくれていました。そういうふうに、障がいがあってもなくても、誰もが夢をもち叶えていけるようになったらいいなと思います」。

しかし、ろう学校の外では手話やろう者への理解が低いことから、送り出した卒業生が「手話で話せる人が会社におらず、周囲とコミュニケーションを取ることが難しく苦しい」と相談に来ることが絶えなかったそう。自身も同じ経験をしたからこそ、少しでも社会の側を変えていき

たいという想いで活動を積み重ねてきました。「活動をしていると『どうせできないよ』と否定的な意見も言われますが、その意見は気にせずに応援してくれる人だけを見て、子どもたちにとっての希望になれるように夢を叶えていきたい」。

活動を進めていく上で大切にしていることは、「誰も置いていかない」こと。手話がわからない人でも参加できるように、手話通訳や筆談対応を取り入れています。こうした工夫により、手話を学ぶ・使うという一見高そうな壁を崩し、手話が身近になったことで手話教室に通い始めた人もいます。

今後はろう者・聴覚障がい者が安心してのびのび過ごせるサードプレイスとして、カフェ開業も目指しているそう。手話に触れてみたい、学んでみたいという方はぜひ倉又さんに会いに行ってみてはいかがでしょうか。



手話で注文している人や、手話で会話を楽しむ人も多い倉又さんのカフェ。今後の居場所作りも楽しみです。



サーフボードの上に立ち、一本のバドルで海などの水面を進むSUP。手話で説明を聞けるので参加者の方は安心して楽しく参加できたそう。

活動の根っこ

「楽しい!!」
これが一番!
倉又司